

スピリッツ ジャッジの精神



最高裁判所事務総局

行政局長（判事）

こいずみ ひろつぐ

小泉 博 嗣

日本サッカー協会

トップフェリーインストラクター

かみかわ とおる

上川 徹

○ジャッジの心得

～公正，中立～

小泉 本日は、大変お忙しいところ、最高裁判所にお越しいただき、本当にありがとうございます。

上川さんは、FIFAワールドカップ(W杯)ドイツ大会3位決定戦で主審を務められるなど、国際主審としても豊富な経験を有していらっしゃいます。

本日は、審判員としてのジャッジの心構えや技術などについて、いろいろお話をお伺いしたいと思っています。

上川 こちらこそどうぞよろしくお願いいたします。

小泉 裁判官は、憲法と法律というルールに従って判断しますが、サッカーの審判員の方々も当然のことですけれどもサッカーのルールに従って、判断をされていらっしゃるのですね。

上川 そうです。サッカー審判員は、17条のルール(サッカー競技規則)とコモンセンス(常識)に従ってレフェリング(審判)をします。

小泉 上川さんは、W杯という大舞台の他にも数多くの試合の主審を務められましたが、上川さんにとって、どのような試合展開が

理想なのでしょうか。

上川 そうですね。試合開始後10分くらいの間は、私自身が試合にきちんと関わって、反則行為があれば笛を吹き、選手に対して反則行為になる基準を示すことにより、その後は、選手がそれを受け入れて試合に集中し、反則行為もなくなるというのが理想ですね。

小泉 先程、公平、平等を表している「正義の像」を御覧いただきましたが、裁判所は公平・中立であることが最も大切です。裁判官が、法廷で着る法服の色は黒ですが、それは、黒が他の色に染まることはないという点で、公正さを象徴する色だからなのです。

上川 サッカーの審判員の服の色も、今はカラフルですが、以前は裁判官と同じ理由で黒色だけでした。サッカーの審判員にとっても、公平・中立が最も重要です。先入観を持たず、起きた事象に対して無心に、素直に笛を吹くことが大切です。難しい試合になればなるほど、プレッシャーはありますが、できるだけ試合に集中して判断をします。

また、個々の反則行為を判断するに当たっては、常に同じ基準で判断することが重要です。そうすることで、選手からの信頼を得ることができ、選手は試合に集中してくれるようになります。

小泉 判断をする際、迷いはないのでしょうか。



か。

上川 もちろんあります。しかし、審判員は素早く毅然とした態度で判断する必要があります。判断の際に迷いがあった場合でも、判定後いつまでもそれを引きずっていると、その後の判定に影響を及ぼすことは経験上分かっていますので、そこは気持ちを切り替えるように心掛けています。

○平常心と

自分で考え判断する力

小泉 個々のプレーが反則行為に当たるかどうかをその場で即座に判断するのは、本当に難しいと思うのですが、どのようなことを心掛けるようにすると的確なジャッジができるのでしょうか。

上川 判定を下しやすいポジションを確保することが大切です。そのような良いポジションを確保するためには、個々の選手の特徴を把握し、チームの戦術を読むことが必要です。この点には、すごく神経を使っています。

小泉 単にボールの行方を追うのではなく、試合の展開を読むことが重要なのですね。

上川 そうです。ポイントは、選手同士が競り合いになる場所、場面（争点）がどこにあるかを予想することなのです。空中にあるボールを見る必要はありません。そのボ



ールが落ちてきたところで、いろいろなことが起こるのですから、その争点が次にどこに移るのかを読んで、素早く行動することが重要なのです。選手の視野に審判員が入れば、彼らも無理なプレーはできませんから、反則行為の予防にもなるのです。

小泉 裁判でも、当事者双方の主張がくい違う争点を早期に見極め、整理をすることが重要です。そうすることで、審理を充実させることができるのです。

ところで、サッカーの試合では、判定に納得しない選手からクレームを言われることもあると思いますが、その時はどのような対応をされるのでしょうか。

上川 選手が我々審判員に対して、リスペクト（敬意）を持って異議を言っているのかどうかを見極めながら対応します。選手の目などを見れば、その選手の精神状態が分かります。興奮している選手であっても、審判員に対するリスペクトが感じられれば、先ずその選手を落ち着かせることを考えます。

小泉 上川さんの御著書である「平常心」には、W杯ドイツ大会3位決定戦で、興奮して抗議をしてきたドイツの選手に、上川さ

んが声を掛けた時のエピソードがありましたね。

上川 あれは、試合開始早々のことでした。非常にテンションが高い試合で、反則行為も多かったのです。ドイツのある選手が興奮して、私の判定に不満を言ってきました。最初は聞き流したのですが、再度言ってきたので、何とか落ち着かせて試合に集中させなくてはならないと思い、試合を止めて、その選手と一対一で話をしました。その後は、その選手も落ち着きを取り戻してくれ、後で「ありがとう」と言いに来てくれました。

選手と話をする時は、こちらがカリカリしてはいけません。落ち着いて対応することが大切だと思います。

小泉 御著書に、サッカー審判員にとって精神的に不可欠なのは、「やる気、勇気、根気、そして平常心だ。」とありました。裁判官にとっても平常心を保つことはとても大切ですが、実際には難しいですね。

上川 そうですね。私も若いころは駄目でした。選手と戦うことしか頭になかったのです（笑）。



【かみかわ・とおる】1963年（昭和38年）生。日本サッカーリーグ（JSL）において選手（主としてFW）として活躍，1992年（平成4年）にサッカー審判員となる。1998年（平成10年）国際主審登録。2006年（平成18年）のW杯ドイツ大会では，決勝トーナメント3位決定戦ドイツ対ポルトガル戦を含む3試合で主審を務める。W杯決勝トーナメントでの主審，同一大会における3試合の主審は，いずれも日本人初。同年12月の天皇杯準決勝での主審を最後に現役を引退。現在は，日本サッカー協会（JFA）のトップレフェリーインストラクターとして後進の指導にあたっている。著書に「平常心」（2007年・ランダムハウス講談社）がある。



小泉 いつごろから平常心をうまく保てるようになってきたのですか。

上川 自分自身に対してある程度自信を持つことができるようになってきてからです。いろいろと難しい試合の審判をさせてもらえるようになった平成14年（2002年）ころからでしょうか。

小泉 御著書のあとがきに，「大切なことは自分で考え判断する力を持つことだ。」という言葉がありました。その言葉は，裁判官にも当てはまることだと思います。自分の頭で考えられるようにならないと，公平・公正な良い判断をすることはできませんね。

上川 人に答えを聞こうと思っても，フィールドでは聞く相手がないわけです。一つ一つの経験を自分のものにして，次に活かしていくことが非常に重要です。

○労働審判制度

小泉 サッカーの試合では，主審と副審2人が審判チームを組んでレフェリングをして

いるのですね。

上川 そうです。試合展開が早くなり，主審1人でゲームをコントロールすることが難しくなってきたことから，副審2人がレフェリングに関わって，主審をサポートするようになりました。W杯ドイツ大会では審判チーム制が導入され，同一の審判チームでレフェリングをすることができたことから，打合せがしやすく，団結力も強くなってとても良かったです。

小泉 裁判においても，事件によっては合議体を組んで裁判をします。その際は，合議体の中で，円滑なコミュニケーションを図り，十分に意思疎通をした上で法廷に臨んでいます。

裁判所では，平成18年（2006年）4月から，労働審判手続という新しい制度が始まりました。労働審判制度においては，労働審判員という民間の方2人と労働審判官という裁判官1人の3人で構成した労働審判委員会が，原則として3回以内の期日で，解雇や賃金不払などの紛争を審理し，調停による解決を試みつつ，当事者間の権



利関係を踏まえて実情に即した審判を行い、紛争の解決を図っています。制度の開始から1年以上経過しましたが、審理期間の平均は2か月半ほどで、訴訟と比較すると非常に短期間で紛争の解決が図られています。裁判所としては、民間の方に審理、判断に加わっていただくのは初めてのことで、よい審理、よい解決を実現するために、労働審判制度の円滑な運営に努めているところです。

上川 サッカーでは、試合前に必ず審判同士で打合せをします。Jリーグの試合でしたら2時間前に会場に入り、約15分から20分くらいの時間をかけて、予想される試合展開、個々の選手の特徴、特に注意してほしい点などを副審に伝え、打合せをします。国際試合の場合は、初めて顔を合わす審判員がほとんどですから、試合前の打合せは特に時間をかけて行います。また、試合中は、試合を止めて打合せをすることは難しいので、副審とはアイコンタクトによりコミュニケーションを図っています。

小泉 労働審判手続においても、労働審判官と労働審判員が、予想される争点や当事者に確認したい点などについて、審理前に打合せを行っています。また、審理中は、アイコンタクトまではなかなかできないかもしれませんが（笑）、労働審判官と労働審判員とが、適宜、コミュニケーションを図りながら、審理を進めています。

○国民の司法参加



～裁判員制度～

小泉 労働審判制度と同じく国民の司法参加という観点から、平成21年（2009年）5月までに裁判員制度が始まります。上川さんは裁判員制度についてどのようにお考えでしょうか。

上川 国民の側からしても、裁判員として裁判に関与することで、それまで見えなかった世界が見えてくるようになると思います。また、裁判員を経験して、自分たちの生活に戻った時に、公平さやルールといったものを意識できるようになるのではないのでしょうか。

サッカーの世界においても、選手が一度審判員を経験する機会があれば、ルールに対する理解が深まり、選手としてプレーをする時に、フェアプレーに徹しようとか相手のことを尊重しようといった気持ちになるのではないのでしょうか。裁かれる立場ではなく、裁く立場になってみると分かることもあると思います。

小泉 裁判員制度について積極的な評価をしていただき、心強い限りです。



上川 実際に裁判员制度がスタートすると、重要な判断を下す仲間になることを光栄に思う人が、大勢出てくるようになると思います。私は、裁判员というのは誇りある仕事だと思います。大きな責任を負うような経験ができるというのは、とても有り難いことですね。

小泉 サッカーの審判員や選手の方もお忙しい時期はおありでしょうが、裁判所としては、参加が可能な時期について希望を伺い、裁判所に来ていただく日を6週間前にはお知らせするなど、できるだけ広く、実情に沿った形で、参加していただきやすいような制度にするための準備を進めているところです。

先日は、あるサッカースタジアムの大型スクリーンで裁判员制度のPR映像が流れました。裁判所としては、今後とも、裁判员制度を円滑に実施するために、なるべく参加していただきやすい制度となるよう裁判所全体の課題として全力で準備を進めていきたいと考えています。

○ロスタイム

～明日への活力～

小泉 せっかくの機会ですので、最後に、何か裁判所に対する御意見や御要望などがございましたらお聞かせいただけませんかでしょうか。

上川 私は審判員をしていて、家族の協力が果たす役割は非常に大きいと思っています。裁判所の方も同じだと思いますが、家族の協力や絆というものがあればこそ、健康で仕事に集中できるのではないかと思います。

本日は、W杯ドイツ大会3位決定戦後の表彰式でFIFAから授与されたブロンズのメダルを持ってきました。3位になったドイツの選手に授与されたものと同じもの

なのです。このメダルも家族の協力と絆の賜物だと思っています。

小泉 貴重なメダルを拝見することができ、とても光栄です。これが、御著書にもありました、上川さんが表彰される際に観客からスタンディングオベーションが起きたとき授与されたメダルなのですね。

上川 はい。審判員が表彰される際、観客からは、無視されるかブーイングを浴びることが多く、そのように賞賛されることは初めてでした。

我々サッカー審判員の仕事というのは、賞賛されるとか評価を受けることは少ないのですが、試合後に選手などから「ありがとう」と言われると、明日への活力になります。裁判所の方も、当事者の方からの「ありがとうございました。助かりました。」といった声があると、また明日への活力が湧くのではないかと思います。プレッシャーがかかる中で、本当にすごい仕事をされていると思いますが、今後も裁判所には大いに期待しています。

小泉 本日は、貴重なお話をいろいろお聞かせいただいた上、裁判员制度への期待も含め、裁判所に対して熱いエールを送っていただき、本当にありがとうございました。

上川 こちらこそ、ありがとうございました。

